KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

伊地知文庫
文庫20
133

文庫20
133

伊地知氏書冊

智連集上

連句ハ奇をもはゝ文をもて和哥乃ゝてゝ
をもとゝまゝ〳〵後こと葉をもて色句を取
なをし習おほ（紅中）といへとも大方概見に寄て奇小
六義十体あり元上下乃白よりて色歌
よハ之儀五体あるへし かゝる儀五体を能
習熟（作者に）之義と云ハ一よハてをもを二よハ白字
合なわ次五体と云ハ（オ）一よハ物の月乃山水を
よ望るのゝ（オ）二よハ海よ舟乃浦乃（つ）（む）

かゝりしこゝには佛家に私語あるのめし四に
は秋の風乃万葉をなひかすのめし五に
語にかく女ちんをなやますのめし
一二儀ニ事一にはてにをは付く六次第あり
一には奇にましニにはてにをはしこゝには結てには
四にはうけてましも五には捨てしまし六には発てに
さしはかるこゝの種有りし一にはまかいまし二には
乱まてこまてそてなれしけりてなく
とても次第を能く心得く連歌をも

はくらしてまよふを明めもして我人になかぬと
おもへるも無智なる行の人は法を流とおもふを
し何の行者の迷を明め法をとえんや諍論
は罪を造るとし連歌そのとき世
人のおもひやる譲会連歌は昔に付京連歌
は付ともに寄合とへるる事なれし
きにあやまりし特連歌は御前の付合をそ侍る
自来我も人も心をさしれそ連歌のみひてくもう
まやくを知まりて有花とあれ秋も雲龍

雨とあれハ付る雨とあれハ枕と云くもりて
袖とあれハ雪霞なと付侍らし去ハ実乃
有ままあられぬ心を残志侍るへしと思ひまする
しきん八残かりて此用の詞よんをうけたるい
ほうしんも付候つきたる此事を能く心得て
云へしさなくして八誹句なりも弁かたし人の
句をも知るへし去実の仕手乃案しての句を
もよく知りかくつくへし主歌八風情よく残
し事方つくる迷去ますへし

是両付の埋ずるなり
当世の心がけに無用の詞に
なし
ふらすして一句知る
かたかるへし
弁へて付べき也 先と所のてには 又風情をとしへ申へきあり

一 浮奇てらひぬ事連哥をも作て風情者也
やすらも浮時しなききくるひのみちらる
きく月くくるしきい弟のおれ流からう
か様よくるしきい弟のおれ流てうと付之又
もろくなかやく花此ゆよう歌
うきなかしる神のなみたのよ小そへ家
本哥よ
嵐吹岸の木葉此日よ流くもろくなかの秋の浪
日よ流くもろく成りしと哥てまきこ後成は
付句ふなかの自余花まく知るへし

たとへハ下句に
なし
付る此上の詞也

二つもんてまそ毎人を下句に
さてもさく乃りのなふ山もみ（里つて）
うきハく都のとを事をめ
世自都の事をそうけまともさて
ハんりこのなかといく付なわ人（せしん）（たし）
蓬の中 此人をとまるや
此り蓬と秋の月乃夫をあけく
世自風持いつれも人てまそしあけて蓬の（廣の内と也 あくるとも三て悪皆付る）（付ると）（たし）
中とうまとるるあけてとゝ事を付し

三うまとめてそを縦上句に
京秋のんまわをくそて乃露
かく数ゆ屋ハ萩ようをうせ
通路の後てまは所る庭の宝（もの）（ところ）（ぬ）
あめる宮をくる社このとみくん
庭を地のふ旅ねの草まくく
是にて一有了簡ト むちまちのハ長まくて な社（あ）
神乃露ようかく数屋の宝ふわる宮と付草（と付）
抜ようむまふ光ゆうこまてまそし自宝そまく（と付也）（と）

澄尚法師

四つけてまそ　たとへハ下句より

きむひもなきまの庵こうか　元

きむひもなきまの庵の山の水

上の句のたより所と下の句のつゐしらに詠むこれハおなじに

と云也、住人ハ岩屋の内に有なを

子の冬に心とゝめし

山ゐなれてや雪ハ降ら春

打そくそ夕ハ

山ゐなれてや雪ハ降らん

山ゐなれてや雪ハ降らん

山ゐなれてや雪ハ降らん

すゑひてハきくちゐ雪ふ乃道

此てには清取てには に似たれ共 句のおしうに上句つゝ切り所を詠むと見ハ

此てには

此句皆うゑ雪ふ乃道

よくく替しの稜ハ下句乃上ハかみの句此歌

をハ雪うけ乃てきをのけてこそと云

上乃句此歌を下乃句此以ハ体雪とて

ゐをうゑ雪てこそと云也

立花てゐた　縦に下句に

梅の葉のうゑ座ハ雪とうゑ

月ハなるゆ此雪乃こちとう社

此句まてゝわかれいなはの山と云本より子細なし

人乃あとをさそひけり　立ち別

先にとしへつることく立つゝくと詠かゝるありけり　てにをは

立別稲葉の山といふ歌あれはそれに寄て

名の所をとし一句にはさいきれを捨てふしもと

いぬしいてきらぬをいうてふまらぬ也

立ほくこうてや雲乃こゆく舟

山紙くり旅人のみちとくたとりも

やとゝわり立ほくこさそへやと云権進ハ捨てふしたるし

六条てふを見よへしも

下句に

おくろ乃まうりよりやはくの花

ちよつ菓へとれさきつ藹ろと前くまの紙

あをしくてさぬろまあさくふまのあらし

志めふ子ハ月さへ人の閑路するく

こぬ花の有ルとかあらし

あふ中も後世のまてハいさしらす　ふらふ木の花に風ありし庭の桜

此句みる人のまて小付作也

いつれも前の句に侍るや

神まなさき人のなとやとひこぬ

此句先の句子細なし

有明の月いはるまて待つあへり

此有明のおもちて面目付人の心ぬけは八月也

と付ヵ中不可然　但是ハ有明の言つゝきに付て

ろさゝてゝと付し皆先とおてゝくさきし庭の松と云

ハとおのぬてゝつきし人てゝまえなれ本哥

植てみる花の並乃庭はなれてまさるふなぢかな　問こぬ

お花まるく付るし此ん月ゝ　ゝてまさるとゝ云

一句に

一句にて

いゝたゝふこゝてまさるとゝ云ふけ花

心てはとゝも先のてはと同以上に

月新のひさもれるやとの板ひさし

あまもふるもきハたゝしちゝ乃秋

神ハるもお里ゆもあゝ　ゝ百ろき

いくゝひみ　ゝ笑いおちなるゝん

お花やそこの人乃ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

初にて八心得かたし是当世人の好作も面白さして寄合ふし只てにはハかりよく付たり是則本ゝ本説と云るし是にて諸ゝ通ゝし同詞にて善悪を分り申し

去にし里をはや遠くふる

是八浦船にしと云つゝけて何し又夫の句ゝ

去にし里をはや遠くふる

夜かせや浦はの舟を送るゝん

是ニを下手の連ゝにて侍れふよしなに詞てにはにあゝまり下手ハいつゝかやゝにするしいあらハこゝを付侍ん寄合に上手下手の二に分くるけれとゝ只寄合にはたに能ハ八則寄合とふるし

是ニを下手の連ゝにて侍れふよしなに詞てにはにあゝまり下手ハいつゝかやゝにするしいくたのも節句のおしゝにむるとあゝハこゝたにハ舟宿道敵と仕るて上手ニおりよくゝ有用ゝ也

立海ゝ二ゝひむまふ月ゝ水

元ハ三水月まゝしかもやらぬとくゝ新ゝ世界

合みゝ移ゝもてるゝをもつて若付ハ別寄奇

本院の寄合なるゝ

一風情ゝを知るゝ事ゝ

出ゝ里ゝ月ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

出ゝ里ゝ月ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

近風の帆をふさゝるゝゝ舟

海の舟出ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

海の舟出ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

とつけるし独ゝて　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

面白し

出る　里うきやをくなる
波風やうゝまのふきを送る舞
さゝれてゝまの連なるゝいつれも詞も船
を付ゝとも文ゝてゝきたにあゝくなるちみ
てきゝゝ数ゝてゝさなわ筆とも下句のかゝる
舟なと孫なと貞取まきてし安合ゝ上ゝ
下ゝまの二八なけ迄とも多ゝ前発の歌多ゝ
ゝゝゝ下ゝ上ゝ乃と　あゝ有ゝ
三上三義平

先日所の五体の次第おゝゝゝしゝゝと申ゝ

一五体沼賀　てゝ八秋の月乃山のゝ我童のゝこと
と云八弥黄神や月の山乃陰を出八未いて称
ともまゝやとゝそ八し面白姿なゝ民神童京
注義ゝ面白なわ
たゝゝ事ゝ八屋ゝゝゝわけ理
秋乃月ゝ八花嘆し山ゝ朝のゝ見
山乃陰をのゝもゝゝ八必此なゝ
一京二舟の遠海ゝ　音流ゝ
里なゝ山ゝとゝゝう移ゝ

浦波

よせくるのうらわし舟乃おもひよりく
此句情之里なき山といふハそれ事にハあるら
まうけなみの舟乃よ流る事んにかゝりしされ
とも舟のなみにうきしつむ風情けなん
前くつしこ風によりて里なき山そともあの孫
なかといふハ人識かれこ於才歌なる花ハ無常
傳叢く許也本意
世中を何にたとへむ朝朗こぎゆく舟の跡のしら浪
貫之講家にさゝめ事考ゐぬしと云ハなき人ハ

あわとしらで山乃松まく
うら浪のよるも舟に月なく
いさ深しはし梢に残る夕日影
なかふ本れ花乃跡とふ風吹て
梢し世をつたる人にも鐘之声
あそらし方れ寄る人にも集て花と講家に
さゝめ事をするつとしも寄合わすにハあわと知
うちといふ外に風情をいひつく珍敷付侍之
ある人にハ人に見らし講家に物いひもとかく

声なき事をおへ尖ゆるほとハいまたしともされとも
声よりハ志あらハれたる人の底哉作者の
内にも まさる発盛んするハ也されとも
能々料簡あるへし
其日秋の風乃万草をなびかすかことしと云ハ松
なくてハ秋の激之山野の草木ハふかるなれと
も風の吹出されてハ何もなびかぬと云事ふ
しそのふる句を招出してあまるになれと
云ハ余とへも

やそおこ出侍やさけかそふらん
蓑の秋ハそ秋ともみえぬ伊駒山
秋宿の樹乃枝になる時ハ伊駒乃山もみえ成けり
むとつかすひに有まゝあまけ理
苅やのひかにぞ此いほあれハ
云ものかを流になそそ事ハひとつ思ひまかせなけれ
連歌に六ヶ句作有一にハ忘乃句二にハ兪句
三にハ付句四にハやり句五にハ風情句六にハ文
字の句おもひの句と云ハ余とへも

梅のうゑをハなふくゝ[illegible]ん

習てなるまゝ[illegible]ハなくさむよ

花をみるおもゝの山乃[illegible]のうゑん

なるまゝ別ハなくさむ習よ梅のうゑ[illegible]

とゝんとゝ色み霞ハ物を薄る物なれ花の色

桃ゝみ[illegible]ゝ何を[illegible]人ハ[illegible]

いふハ[illegible]ゝ[illegible]乃[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]

法師乃むゝとゝんといふか

*是又同城三浦士へよりて我かふゝすむかへんとゝ

生をむゝとゝんといふ[illegible]一隠お

もゝ別いゝ[illegible]

工夫ゝ成ゝ[illegible]

二乃月乃[illegible]

あ[illegible]里[illegible]

[illegible]

そゝ[illegible]あ[illegible]小[illegible]

前月のゝ[illegible]

[illegible]

時雨ふるあとまもなく雲乃迷うむ
雪まなかのそハなを道ものこ
丈原をみまをハ落葉のやゝ残らん
あゝまなかて雪ハそれ雪かも
そゝと落葉まのハ風を付 落葉ハ雪を付く
古祢よハ嵯〳〵 落葉ハ神元月乃如し雪を
冬深事を付て時代うつして嵯〳〵 高世
乃句し
之の付句とそ 緩ハ下句に
きるもやう

かゝるのまハひとりうれの社
う家世をハてゝ住る山の家ハ雪
おのおく山ハまむしのもの
そこなてハくゝ埋ぬ谷地水
谷地庵まてハくゝ流めとゝれそ
付句 古祢 付合 ハ付くゝ
四屋の句とゝ是ハ連句の付まゝ成る雪をと
もかくしまをやの句とも
舟のゆく 時代おこ落〳〵波

此心ふけ句といふせこのおく山に住おしゝ心ゝしと古ハ人のまま正ふれ共水に取成て谷の水とちがくれハ難句ともし
是ハほくの句のあやまりつまりたゝを付句と心得たりすへてさにハあ
やり句とちがたと
つハ下句に

山より来くれるやとくのすもりん
来みぬ山をんなを行くるなやわ匂とも也又
きをんの乃秋をもうこ海まんくとてあ野秋と
山よりの春くうるあわと付まいうるきん
とくゆゆううなみ此と
ふ乃山のあ行るいふいふのもりん
月の入山乃あふたや霞むらん
月に漕舟路と山も朧にて
比旬行も打もひあやりくる風情なるかやうにする体直てに
風情旬ふもうこへさ
ふせいの句と云ふ合の浮思也さてさには さうにすきし

五

聖市の打ふに面かわりなす
ゆるよりのもう風ふみたるい雪みるる
風ふ入月下猪の打ふ
、是こと川情の句にて待れその縁の言葉見えたるに付こそ嬉よく付れ
、打ハゆるよりもうくるるハ雪ふ打付
ゆるよりもうくるる注ふことそそて百と聖る
中の川情あり
旬行の世伊ふまて風情旬よりも
ふれとみもるる打乃ひとりも
里よりしあふたの浦に夜八明て
ふ月ふ西舟の寺や山ふ秋八明て
ふ月ふ西舟の寺やーーもるん

六

人数よりいとゝ改なるかゝりとく付なの
まかのもうまよみくるる藤乃風
老ふそーやなりもあるゝ年下
是文秋に半の詞
をハまよ不ま毛細ハ
紙付ハ
大氏大事ハ二隆陳より周防法師ハ下
西ハ下向ハ吸新所持九州ニ者西ハ
也周防国三年書面也二人ハ

さてさて〻天さいわ〻家〻に伝ふるもの〻
弘長の相伝にも不見明　終に未だ太ぶしさ外ハ家〻
引見分　初ること成ル　辨おぼえ伝ふ也　をしるし侍る也以合、
冒頭の本書ハ迄て三条殿にて作上覧候ハ、此者子合考伝の旨
者也

朱書東北帝大本也　此奥ニ執筆ノ日一条有未ニ　李紙作と有